

村を歩く (フィールドワーク心得帖 第3回)

著者	重富 真一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	177
ページ	48-49
発行年	2010-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004492

村を歩く

一九八〇年代末から九〇年代半ばにかけて、私はタイの農村に足繁く通っていた。当時、私の関心は、タイ農村の人々がどのような協同活動をおこなっているのか、にあった。既存研究によれば、タイの農村は社会規制が弱く、組織が希薄だと言った。それゆえ「ルースな」社会とも言われるタイ農村とは、いったいどんな社会だろう。こうした問題意識に引かれて私がとった方法は、定住調査（一年間の住み込み調査）、訪問調査（短時間のインタビュー調査）、滞在調査（数週間の滞在による調査）の三つである。

■定住調査

一九八九年一月から一年間私は東北タイのトン村に住み込んだ。そこはコンケン大学の先生に紹介された村で、村長が「来てほしいよ」と言ってくれたので決めたのである。村長は自宅の一室を私に与え、二人の村人を助手に選任してくれた。ひとりにはワイトゥーンという三七歳の男性で、もう一人はリーという六〇歳に近い農民である。ちなみに私は三〇歳だった。

村に住み始めてしばらくは、ワイトゥーンと一緒にぶらぶら村内を散歩するだけ。村人にこちらの顔を覚えてもらいながら、写真を撮ったり、「これなあに」と話しかけたりした。ワイトゥーンがいるので村人も安心するし、私が出た村人がどういふ人なのか、後でワイトゥーンに聞くこともできた。ワイトゥーンは物静かな男で、尋ね

ると答えるし、頼むと確実にやってくれるが、それ以上のことはしない。インタビューでも私が村人の答えを勘違いしたようなときだけ、「それは違うよ」と割って入る。調査助手の「翻訳」が最小限になるという意味で、私には大変ありがたかった。

村に入って三カ月ほどした頃、私は村の全戸調査を始めた。村は三〇〇戸以上あって、さすがにワイトゥーンと私だけでは足りず、他に数人の村人を調査員として雇った。この調査は農村世帯の土地を媒介とした共同関係を捉えるためのもので、質問項目も家族構成や土地所有関係などに絞って入っている。何ページにもわたる調査票で一つの村を徹底的に調べ、村の全体像を明らかにする、ということには、私の関心外であった。調査には一カ月かかったが、おかげで村人の生活がイメージできる

ようになった。こういう調査はやはり住み込みでなければできない。

やってみて分かったことだが、村人の調査員は、質問の意図さえ分かれば、かなり正確に情報をとってきてくれる。質問項目も、隣人同士だと聞きにくい内容は入れていない。なお調査員を探す上での私の基準は、まじめでがまん強い、という一点である。はじめ調査員全員で一つの世帯を調査する。その時の様子から、適性があるか否かは大体分かる。調査に向かない人には、テスト調査の日当だけ払って、あとはご遠慮願った。

一方、リー翁の方は正直使いあぐねていたのだが、ある日、一〇〇キロほど離れた町まで車で行くこうとしていたら、途中通る町とその間のキロ数をそらんじて言った。それからというもの、私はリー翁の記憶力を信じることにし、彼から村の組織経験にかかわるたくさんのお話を聞いた。そのリー翁と、ある日世間話をしていたら、「境界柱」という言葉が出てきた。村の内と外を分ける目に見えない境界があつて、それを柱で表しているという。すでに村を随分歩き回ったのだが、そんなものは見

たことがない。すぐさまリー翁と村の端まで行き、雑草に隠れ朽ちかけた木の柱を見つけたのだ。そこには僧侶が打ち付けたという金属の魔よけ札が付いていた。

「タイの村には境界がある」。こんなことはどの本にも書いていなかった。日本の村人がムラ境まで虫を追うように、タイの村にも領域がある。だとすれば、村はひとつの団体として存在しているのではないか。「ルースな農村社会」では説明できないものを、私は見つけたと思った。村で生活しているからこそその発見である。

■訪問調査

トン村の近くの村には、ライスバンクといって村人が共同で米を蓄え、村人に貸し出す組織がある。「おかしい、タイの村には組織がないと言われていたのに」。という訳で、私はそうした組織活動のある村を車で回ることにした。

まず、県や郡の農村開発部局を訪れ、組織化の成功例を聞く。当時のタイは地方の電話事情があまり良くなかったから、こうした事務所へ行くのもアポなしのことが多かった。NGOがあ

専門はタイ地域研究、農村社会、農業経済、農村開発
 タイ農村調査の成果は、『タイ農村の開発と住民組織』（アジア経済研究所、1996年）にまとめられている。
 なお、現地調査の様子は「映像で見るアジ研」でも紹介されている。
www.ide.go.jp/Japanese/Info/Profile/movie.html

れば、その事務所にも顔を出した。そして教えてもらった村に、道々尋ねながら行く。村に着いたら村長を捜し、村の概要を聞き取るのである。その頃、農村にはほとんど自動車がなかったから、いきなり行っても村長か、その助手ぐらいは村にいた。そして突然の外国人の訪問にもかかわらず、聞き取りを拒否されたことは一度もない。こんな調子で、はじめは東北地方から、続いて北部や中部へも足を伸ばして、村を回った。

聞き取りに際しては、一応調査票を用意していた。調査票といつても住民組織に関連した質問が、覚え書き程度に書かれたA4の紙を数枚綴じたものである。ほとんどが余白で、そこに聞き取った内容を自由に書き込むようになっていた。しばしば裏も記入欄になる。話が展開したり、地図を書いたりすると、余白だけでは足りないからである。

随分と雑ばくな調査票であるが、それでも同じ問題意識で同じ質問をどの村に行ってもやるわけで、おのずと村々の違いや共通点が見えてくる。とくに重要なのは地方による違いである。数年かけて一三〇カ所以上

を回るうちに、「トン村」や「東北タイの村」ではなく、「タイの村」のイメージができてきた。

■滞在調査

訪問調査をすると、住民の組織活動という点でもおもしろい村に出会う。組織化成功の理由を知るためには、そういう村に入り込んで調査しなければならぬ。また、東北地方以外の村落社会も詳しく知りたくなった。そこでトン村での滞在

終了後に、訪問調査村の中から東北一カ所、北部一カ所、中部二カ所を選んで三週間程度の滞在調査をすることにした。訪問調査で村長とは知り合いであるし、村の中には一人ぐらい泊まるところがあるものだ。だいたい高床式住居の一角が私の寝場所兼研究室になった。食事もある家で食べさせてもらう。三週間の間に、トン村同様に村人の調査員を雇って戸別世帯情報を集めると同時に、村や組織のリーダーから直接聞き取りする。また組織活動に関する文書（帳簿など）をコピーさせてもらう。貯金組合などは金が絡むから、会計係の村人は必ず記録を付けている。それを丹念に見ていけば、組織がどのように

して変化していったのかよくわかる。聞き取りだけでなく、こうした文字による記録を収集するには、やはりある程度の滞在期間が必要である。戸別世帯調査の方は、地方による土地所有関係の違いを明らかにする上で役立った。そしてこの滞在調査によって、私は東北地方以外の村についても、かなりの知識と感覚を持つことができた。

■三つの方法を組み合わせる

これら三つの方法それぞれは、けっして目新しいものではない。私の違うところは、この三つを組み合わせる調査したところにある。トン村に住みながら他の村に出かけては聞き取りをする。村々を回るとトン村では見られない発見がある。そうするとトン村に帰ってから、トン村には無いかと探してみる。無ければ、なぜ無いのか考える。逆にトン村で知り得たことを訪問調査の質問項目に加えて、他の村ではどうなのか聞いてみる。訪問調査で住民組織の広がりや大まかな特徴を捉えておいて、滞在調査でその組織や組織過程の内部に迫る。

なぜこんなやり方をしたかと言えば、タイの農村を深く知り

たかったし、また一つの村だけで「タイの」村を語りたくはなかったからである。住民の組織活動に関心があるから、戸別世帯の経済活動については詳しく調べていないし、訪問調査でもリーダー層にしか会っていない。このように調査の目的によって調査方法は違ってくるだろう。環境によっても調査の仕方は変わる。定着調査が許されない国も多いし、訪問調査にかならず役人が付いてくるところもあるのだ。

だから「正しい」農村調査の方法などどこにもないのであって、ここに書いたことも、一人の調査者が、二〇年余り前のタイ農村で試みた、ほんの「一例」にすぎない。



左端が助手のウィトゥーン、その隣が筆者。1989年、住み込んだ東北タイの村で糸賀滋氏撮影